

「不屈の意志」示した最後の3ピアノ・ソナタ

ベートーヴェン
第30〜32番

デビュー40周年記念で演奏

小山実稚恵さんが「人生をともに歩んでいきたいと思っている作品」を選んでもらい、テーマ立てをしなが
ら綴っていく、大阪新企画の演奏会「小山実稚恵のピアノニズム」。2025年4月のシリーズ第3回では、
ベートーヴェン（1770〜1827）の「最後の3大ピアノ・ソナタ」、第30番・31番・32番が一挙に演奏されま
す。テーマ（モチーフ）は「永遠の命」です。25年はデビュー40周年にあたり「演奏会はその記念」と話す小
山さん。プログラムへの思い入れなどを聞きました。

小山さんは2025年にデビュー
40周年（演奏家生活40年）を迎えられま
す。記念の年、節目の年ですね。

小山 そうなのです。チャイコフス
キー国際コンクール（ピアノ部門、19
82年）に出場したときはまだ学生（東
京芸術大学大学院生で、次の85年のシ
ヨパン国際ピアノコンクール出場を
機に正式に演奏家として活動を始め
ましたので、2025年が40周年に
なります。

「40年」は私にとって大きな節目
と考えていますので、東京・サントリ
ーホールで2022年から25年まで
年1回、4回にわたる協奏曲シリ
ーズ「Concerto（以心伝心）」に取り組
んでいます。大阪では、こんどの「ピ
アニズム」シリーズ第3回を40周年
記念にしたいと思っています。

「一挙演奏」は特別なこと

そこで、プログラムをベートーヴェ
ンの「最後の3大ピアノ・ソナタ」一挙
演奏になさった訳ですね。

小山 実は、この最後の3大ソナタ
は「ベートーヴェン没後200年」
の2027年のプログラムにと考
えたこともありましたが、こんどの
大阪での記念リサイタルでどうし
ても演奏したくなって、取っておく
のをやめました。（笑）

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第
30番・31番・32番のそれぞれは、先
の「ベートーヴェン、そして…」シリ
ーズ2019〜22年や、かつての12年
間・24回の「ピアノ・ロマンの旅」シ

最後の3曲のソナタ。

ベートーヴェンの音楽人生がピアノの響きのなかで走馬灯のように
流れてゆく。

〈真実・命〉 〈愛・嘆き・希望〉 〈意志・浄化〉

弾く者も聴く者も、ソナタに込められたベートーヴェンの魂に打たれ、
そして、新天地へといざなわれてしまう。

ベートーヴェンは、やはり未来を凝視している作曲家なのだ。

「小山実稚恵のピアノニズム」2025に寄せて

小山 実稚恵

インタビュー

小山 実稚恵さん



(C) Hideki Otsuka

シリーズ（2006〜17年）においても演奏
なさっています。でも「3曲を一挙
に」というプログラムはあまりお目に
かかっていませんね。

小山 3曲を一度にというのはC
Dの企画として始めましたが（CD
リリースは2021年）、演奏会のプロ
グラムとなると、やはり特別なこと
と考えていましたので、ほとんど行
っていません。でも、こんどは私に
とって大きな節目のリサイタルで
すので、ぜひとも演奏したいと…。

私が、ベートーヴェンのそれらの
作品に格別の思いを募らせたのは、
やはりコロナ禍が広がったときで
す。この「ピアノニズム」シリーズ第
1回のときにお話ししましたが、演

奏会が次々と延期や中止になって
いくなかで、私はコロナ禍が人間に
警鐘を鳴らしたのではなかったか
と思ったりしました。平和におぼれ、
私たちは自然に対して傲慢になっ
ていたり、対人間でも感謝を忘れた
りしていたのではなかっただろう
か、と気づいたのです。

そしてその時期にベートーヴェ
ンの「生誕250年」（2020年）が
訪れたことは決して偶然ではなく、
「苦悩を乗り越えて希望をつかみ
取れ」という、ベートーヴェンから
のメッセージのように思ったので
す。

私の学生時代の恩師はドイツ音
楽、とりわけベートーヴェンに傾注
されていまして、私はその影響
を大きく受けています。その頃、す
でにベートーヴェン作品の虜にな
っていましたが、演奏家として独り
立ちしてからはなおさらというか、
ベートーヴェン無しではいられな
くなりました。それはともかく、ベ
ートーヴェン作品は、ピアノ・ソナ
タやシンフォニー、そのほかもみな、
演奏する者・聴く者への迫り方が特
別なのです。時代や状況を超えてダ

イレクトに訴えてきます。それに触
れると魂を揺さぶられます。心をわ
しづかみにされるのです。ですので、
コロナ禍のさなかに先ほど申した
ようなことを感じて、私自身、ベ
ートーヴェンの曲をもっと深め、皆さ
まに聴いていただきたいと強く思
うようになりました。そして何かに
突き動かされるように、こんどの
40周年記念の大阪リサイタルのプ
ログラムに「最後の3大ピアノ・ソ
ナタ」を選んだのでした。テーマを
〈永遠の命〉として…。

異なる個性をもった3曲

「最後の3大ピアノ・ソナタ」の各曲
の特徴、魅力といったところをお話し
いただけますか。

小山 そうですね。ベートーヴェン
はこの3曲に、それまでからのフー
ガ（注参照）や変奏曲形式の技法を引き
継ぎ、発展させ、自分の人生観を注ぎ
込んだといえるのではないでしょ
うか。でも3曲は、1822年までの数
年間にほぼ並行して作られながら、
それぞれ違う個性を持っています。

まず第30番（1820年完成）は、前
作の、あの壮大な第29番「ハンマー
クラヴィーア」（1817年完成）とは
対照的に、大変落ち着いた、美しく抒
情的なソナタです。演奏時間も29番
の半分ほどです。でも音楽密度は高
く、とくに民謡ふうの主題と6つの
変奏曲による第3楽章には心の底か
ら湧き上がる感動を覚えます。その
主題は最後に回歸し、もう一度演奏
します。まるでバッハのゴルトベル
ク変奏曲のようです。作曲者が「歌う
ように、心の奥からの感情を込めて」
（第3楽章の発想指示書き）演奏するよ
う求めているとおり、まさに「歌」を
感じる曲です。

次の第31番（1821年完成）は、先
の30番以上に抒情的です。第1楽章
に「愛をもつて」という発想指示があ
りますが、本当に慈愛に満ちた豊か
な楽章です。第3楽章は、歌詞をつけ
て歌いたくなるような美しさと哀し
さをたたえたメロディ……いわゆ
る「嘆きの歌」ですね、それと規模の
大きなフーガが聴きどころです。「嘆
きの歌」は、最後には希望に満ちたフ
イナレを迎えます。私はコロナ禍
のさなかの、出口が見えていない頃、
この31番にものすごく心を揺さぶ
られました。

（注）フーガは曲の途中から、前に出て
きた主題や旋律が次々と追いかけるよう
に現れる楽曲のこと。